

国が君主の存在およびその人身の無答責を憲法に定めた国家であつて、君主の身体がすなわち国家／王朝そのものであるならば、オスマン帝国は一九二二年十一月四日における政府の消滅によつてではなく、十一月一七日における君主の亡命をもつて滅亡したといえるであらう。

このように見ていくと、オスマン帝国の滅亡時点に関しては様々な立場・観点からの解釈が可能であつて、それをもつて特定することは困難、あるいは誤解を恐れずにいえば、無意味であると結論せざるを得ないのである。

第五六一回 七月二七日(木)

一八〇二一世紀ウルムチ(烏魯木齊)の 歴史の変容

——中央ユーラシア史の中の新疆——

東洋文庫研究員 新 免 康
中央大学教授

中国の西北部辺境に位置する新疆ウイグル(維吾爾)自治区は、テュルク系言語を用い、主にイスラームを信仰する民族であるウイグル族を多数民族とする地域である。その自治区都であるウルムチ(烏魯木齊)は、一八世紀半ばに新疆を領域化した清朝によつて都市としての建設が着手されて以来、この二世紀半余りの間に著しい発展を遂げてきた。現在のウルムチは、三〇〇万人を超える人口を擁し、高層ビルの林立する現代的な景観をもつ都市である。漢族を中心としつつも、ウイグル族や回族なども相当規模で居住する複合的な民族構成をもつウルムチは、マルチニエスニツクな新疆の地域的特性を反映する存在であると言える。本報告では、中国辺境部のユニークな相貌をもつ都市であるウルムチをとりあげ、その都市としての形成から現在へと至る歴史の変容のプロセスを辿つてみた。

ウルムチの都市としての基盤が構築されるのは、一八世

紀半ばに清朝により新疆統治の軍事・行政拠点の一つとして位置づけられたことによる。まず四つの城門が設置された迪化城（漢城）が築造され、そこには主に中国内地から交易活動などに従事する漢族が移り住んだと言われる。他方、ウルムチ河西岸に建設された鞏寧城（老滿城）には、烏魯木齊都統らの旗人官僚が駐在し、伊犁將軍を中心とする新疆統治体制の中で「東路」を管轄した。その後、一九世紀後半の大規模なムスリム反乱を経て一八八四年に新疆省が設置されると、ウルムチは新疆巡撫の駐在する省都として、きわめて重要な役割を担っていくこととなる。一八八六年には城市壁が迪化城（漢城）とその東北に位置する新滿城を含む形で大きく拡張され、六角形様の形状の広大な新しい迪化城が出現した。この拡大された都市域は、現在のウルムチ市の中心部と重なる。

清朝末期から中華民国期にかけてのウルムチは、独特な民族構成と都市空間配置を内在化させることとなった。まず、漢族を主要な住民とする迪化城の内部には、新疆省政府の官衙が置かれるとともに、天津出身の「八大家」など有力な商家が軒を並べる中心部の繁華な街区は、経済活動の中核としての場を構成した。他方、迪化城の南門より南方には、新疆の民族構成と地理的位置づけに関連したユニークな都市区画が出現した。一つは、回族とウイグル族の居

住者を中心とする地区である。一八世紀半ば以降、陝西・甘肅などの諸省から新疆北部に多数の回族が移住し、ウルムチ市内にもかなりの規模で定着した。陝西大寺など主要なモスクの分布状況も、このことを如実に物語っている。この回族居住地区の南方に位置したのが、天山山脈南側の諸オアシス地域からの移住により形成されたと考えられるウイグル族居住区である。とくに二道橋周辺の地区は、近年の都市再開発により劇的な変貌を遂げるまで、ウイグル族が集中居住し、その一角に特有なバザール（市場）がにぎわう地として存続した。

さて、二道橋よりさらに南部の区域では、新疆の対外関係の展開におけるウルムチの重要性に基づく、ロシア帝国籍の商人を主体とする地区が独特な光彩を放っていた。一八八一年に締結されたサンクトペテルブルク条約により新疆各地の貿易活動においてロシア籍商人に免税特権が認められるにともない、ウルムチにもロシア帝国領から多くの商人たちが進出し、ロシア領事館を中核とする地区を形成したのである。ロシア籍商人たちの大部分はテュルク系ムスリムであるタタール人やウズベク人であり、彼らにより開設された商社である「洋行」の商館や彼らの住宅が並び、この区域を軸としてウルムチは、当時の中国—ロシア関係に特有な政治的条件

に依りつつ、新疆―ロシア帝国領間の貿易の主要な拠点の一つとして、そして輸出用の新疆産・中国内地産物品の集散の結節点として機能したと考えられる。タタール人商人たちがそれ以前からロシア領辺境地域を含む広大な空間に拡散して商業活動に従事していたことを考慮するならば、「洋行」を主役とする当該地区は、中央ユーラシアにおける新疆の空間的位置づけを背景とする、国境を跨ぐ人的移動と広域的な経済活動のあり方をいわば体現する存在であったと言えよう。しかしこの地区は、一九三〇年代後半から次第に解体され、中華人民共和国成立後に姿を消すことになる。

中華人民共和国時代のウルクチは、一九五五年に成立した新疆ウイグル自治区においても、当地域における行政上の中心としての地位を保持するとともに、中国内地から新疆への漢族の大量移住における受け皿としての役割を担った。改革開放後、都市の大規模な再開発の中で、住民の多民族的な人口構成を残しつつも、都市景観という点においては他の中国の都市との差異を消滅させていった。自治区外からの人口移動の一層の加速化という近年の現象は、中国全体における「都市化」現象の奔流とも連動しながら、ウルクチが辿ってきた歴史的プロセスの中でも重要な局面を構成することになるであろう。